

「研修会等名称」

一般財団法人 全国大学実務教育協会 「第7回 FD 教職員実践研究会」

場所：オンライン開催 (ZOOM)

期間：2021年10月24日 (日)

1. 研修の内容

本研修は、一般財団法人 全国大学実務教育協会 が毎年行っているものである。同協会は、大学・短期大学における大学と社会をつなぐ実務教育の普及に重きを置くとともに、大学・短期大学における「アクティブ・ラーニング」(能動的学修、主体的・対話的で深い学び)を踏まえた実務教育力を備えた大学教員の育成にも力を入れている。昨年度はコロナ禍の影響で開催されず、本年度は対面により実施される予定であったが、コロナ禍の状況を踏まえ、ZOOMによるオンライン開催に変更された。

私は2019年8月・9月・10月に、この「FD 教職員実践研究会」の基盤となる「能動的学修の教員研修リーダー講座」に、大学より派遣された。このリーダー講座では、「アクティブ・ラーニング」(能動的学修、主体的・対話的で深い学び)はどのようなものかを実践および課題を通して学び、また少人数による演習クラスだけではなく、大人数の講義科目においても能動的学修を実践する必要があることを学んだ。同講座は、自分の大学における教育の姿勢が大きく変わるきっかけとなったこともあり、その「応用編」に位置づけられている本研修には、前講座で得た教育技術をさらに高めるためにもぜひ参加したいと、かねてより考えていた。

本講座は、以下の内容で行われた。

・ 趣旨説明 (講義)

『「教学マネジメント指針」のねらいと意義』

全国大学実務教育協会 代表理事・副会長

山梨大学 理事・副学長

清水 一彦 氏

・ 基調報告 (講義および演習型研修)

「コロナ禍でのFD実践には何が必要か?—各自の経験から考える—」

武庫川女子大学 共通教育部 准教授

寺井 朋子 氏

・ 参加者によるFD実践発表・質疑応答

(報告テーマ)

1. FD・SD運営上の課題

2. シラバス作成と授業デザイン

3. 学修成果の可視化

・ 上記3テーマに関する講義、および講師・参加者との意見交換

(講義)

1. 内部質保証、FD・SD運営上の課題、シラバスと授業デザイン

静岡福祉大学 子ども学科 教授

小川 勤 氏

2. 学修成果の可視化

清水 一彦 氏

以下、各発表について書き記す。

【1. 「教学マネジメント指針」のねらいと意義（清水一彦 氏）】

本講義では、「教学マネジメント」という考えがなぜ必要かということについて、まず説明があった。現在は、各大学に、内部的には「学修者本位の教育の実現」を図るための教育改善が求められており、外部的には「社会に対する説明責任」（＝アカウンタビリティ）を果たす教学マネジメントが求められていることがまず示された。

そのうえで、各大学は、教学マネジメントが大学内の「システム」として確立された教学運営が必要であることが説明された。特に、学長・副学長・事務局長・学部長・部課長等、教学運営に関わるものの責任が大きいことも示された。

また、文部科学省の「教学マネジメント指針」についての解説があり、「卒業認定・学位授与の方針」（ディプロマ・ポリシー：DP）、「教育課程編成・実施の方針」（カリキュラム・ポリシー：CP）、「入学者受け入れの方針」（アドミッション・ポリシー：AP）を明確にし、この三つの方針を通して学習目標を具体化したうえで、授業科目・教育課程を編成および実施し、さらに学修成果・教育成果を把握して可視化する必要があることが示された。そのために、「大学全体」のレベル、「学位プログラム」のレベル、「個々の授業科目」のレベルで常に PDCA サイクルを回し（Plan 計画 → Do 実行 → Check 評価 → Action 改善）、この3つのレベルの歯車をうまく回していく必要性が説明された。

また教学マネジメントとして「内部質保証システム」を構築することの意義が、分かりやすい図式とともに説明され、学修成果の把握・可視化が大学としての「質保証」につながることで、また学修成果を基盤に「質向上」を図り、学修成果をしつかりデザインすることが、究極的には「大学づくり（大学としてのブランド化）」につながるということが説明された。

これらは公益財団法人 大学基準協会の「大学認証評価」でも言われていることである。大学執行部ほど高位のレベルではないとしても、名古屋教学部長として教学マネジメントに関わりのある私としては、内部質保証・学修成果の可視化の重要性について再認識させられた講義となった。

【2. 基調報告：コロナ禍での FD 実践には何が必要か（寺井朋子 氏）】

寺井氏は、教育心理学を専門としているが、大学内でも FD に関する責任ある役割を任されている。全国大学実務教育協会の本研修（FD 教職員実践研究会）には、毎年欠かさず参加しているとのことである。

「コロナ禍における遠隔授業」ということを皮切りに、受講生参加型の形で発表された。受講生に対して、この2年間の遠隔授業について、半期ごとの単位でその期間を独自の視点で名称をつける形でコロナ禍での遠隔授業運営を振り返るよう求めることから、発表を始められた。

ご自身の専門である教育心理学の知見も導入しながら、大学教員の特性や取り巻く環境を分析し、教員の教育に対する「信念」の強さという大学教員の特性を理解したうえで FD を考えていく必要性を強調された。

また、文部科学省の FD の定義を再度紐解くことにより、教員相互に助け合いが必要であること、また「ベテラン教員が新任教員を指導する」という従来の FD の

姿から、コンピュータスキルを多用するオンライン授業では、むしろ「若手教員がベテラン教員をサポートする」という状況も多数生まれており、FDを醸成する素地がより備わってきていることを指摘された。また教育手法の点で、対面授業でできることと遠隔授業でできることは異なるという事実が示され、それを踏まえたうえでFDを考える視点が大切であることも示された。

コロナ禍による遠隔授業を振り返るよい機会になったと同時に、参加者同士、遠隔授業の実践方法について意見交換することで、よりよい教育の在り方を考える時間となった。

【3. 参加者によるFD実践発表・質疑応答】

本研修の開催に当たり、事務局からはあらかじめ「1. FD・SD 運営上の課題」「2. シラバス作成と授業デザイン」「3. 学修成果の可視化」の3つのテーマのうちのいずれかで、発表を準備しておくことが求められていた。

私は「2. シラバス作成と授業デザイン」をテーマに選び、教学部長になる前は、単なるシラバスの執筆者であった自分が、同役職に就いた後は、シラバス執筆を依頼し、かつ点検する立場になったことを踏まえ、シラバス執筆依頼に絡む問題点を自分なりに分析し、そのことについて発表した。

また、「大人数講義においても、アクティブ・ラーニングの手法が必要である」という視点を、どのように教員に浸透させていくかを自身の課題とするとともに、かくいう自分も、2019年の本協会の「能動的学修の教員研修リーダー講座」を受講する前は、アクティブ・ラーニングは「場合分け」と思っており、英語などの少人数クラスで、学生を指名しながら授業を進めていく形にアクティブ・ラーニングを導入し、大人数講義はアクティブ・ラーニングに馴染まないと考えていたことを紹介した。また前者の学生指名型の授業も、真の意味で「アクティブ・ラーニング」になっていなかったことを説明した。

そのうえで、2019年の「能動的学修の教員研修リーダー講座」を受講後、自分が大人数の講義型の授業にどのように「アクティブ・ラーニング」を取り入れたか、共通教育科目「言語と人間」、国際コミュニケーション学部専門科目「言語学概論」、それから講師を務めた「文部科学省認定 教員免許状更新講習（英語）」を題材に、具体的に紹介した。そのうえで、アクティブ・ラーニング（能動的学修）に関する自身の課題を披露した。その課題とは、以下の2点である。

- (i) 小規模の能動的学修だけではなく、「ワールド・カフェ」などの大規模な能動的学修をどのように授業に組み入れていくか。
- (ii) 能動的学修を授業に取り入れると、学生は単なる座学よりも「学びが深まった」感覚を得ることができるが、教員側の論理で言えば、どうしても学習内容の「量」が減ってしまう。「詰め込み教育」ではなく、「学生に理解を促す教育」が実施できていると考えればよいのかもしれないが、学習項目を最後まで実施しなければならないという自分なりのプレッシャーもあり、能動的学修の効果と実際の学習内容の量との塩梅をどう取るべきか。

後者の(ii)については、講師の寺井氏より、学ぶ量が減っても、学生の学びの「深化」により目を向ける必要性、および物理的な時間を増やすためには、準備学習・事後学習を有効活用するという案を提供いただき、非常に参考になった。

他の参加者も様々な発表を行ったが、某短期大学より参加した方（大学でFD委員長を務める）は、学修成果の可視化について、大学で行っている取り組みを紹介

され、学生が入学時と卒業時でどれだけ自分が学問的および人間的に成長しているか、また自分が足りていない学びの視点はどこかを顕在化できる独自のモデルは、非常に参考になった。小規模短期大学ではない本学では、紹介されたものをそのままの形で適用することはできないが、現在、大学基準協会の大学認証評価でも求められている「学修内容の可視化」を考えていくうえで、大いに参考になった。

このように、参加者による FD 実践発表、またそれを踏まえての講師も交えた参加者同士の活発な意見交換は、自分が気づいていなかった視点にも気づかされるとともに、FD に関する知識を深めることができた非常に有益な機会となった。

【4. 上記3テーマに関する講義、および講師・参加者との意見交換】

まず「1. FD・SD 運営上の課題」「2. シラバス作成と授業デザイン」「3. 学修成果の可視化」の3つのテーマに関する講義が、小川 勤 氏（静岡福祉大学教授）、清水一彦氏（山梨大学理事・副学長、全国大学実務教育協会代表理事・副会長）より行われた。

小川氏は、前任校の山口大学で自身が関わった内部質保証システムの構築の姿を紹介しながら、「FD・SD 運営上の課題」および「シラバス作成と授業デザイン」について講義をされた。

まず FD については、次の3つのレベルで FD が実施されていることが大切であると説明された。

- (i) ミクロ： 教員を対象とする領域（狭義の Faculty Development）
- (ii) ミドル： カリキュラム（教育課程）を対象とする領域（Instructional Development）
- (iii) マクロ： 大学全体の研究教育環境および教育制度を対象とする領域（Organizational Development）

またこれら3つのレベルの FD は、有機的に連携して初めて FD 活動として全面展開が可能になることに留意する必要があることを強調された。

シラバス作成については、シラバスは教育指導に関する学生との「契約書」であることを再確認し、そのうえで、授業デザインを構築する上では、以下のことに特に注意を払う必要があることが述べられた。

- ・ 学習を促すような授業計画を設定する。
- ・ 授業内容はできるだけ具体的に記載することで、学生の授業外での学習を促す。そのために、内容は詰め込み過ぎず、学習目標は達成しやすい順番にし、学習目標に応じた方法を用いて、授業形式を具体的に示す。
- ・ 目標の到達度を確認するための評価方法を設定する。
- ・ 授業内容と関わる授業外学修を設定する。
- ・ 授業期間終了後にシラバスを改善する。

次に清水氏が、「学修成果の可視化」を行うための方策として、昨年度まで理事長・学長を務めておられた山梨県立大学で自身が行った改革を題材にして説明された。

学修成果の可視化を行うためには、内部質保証システムの体制をしっかりと構築すること、および「検証・評価」に関する明確な目的と視点を持つことが大切だと

説明された。目的としては、「学問の府としての教育研究」、「学修成果としての学士力」、「社会システムとしてのアカウンタビリティ」が不可欠であり、視点については、「社会（必要度）」、「組織（有効度）」、「経営（効率度）」の視点が不可欠だとの説明がなされた。

そのうえで、大学全体・学部・プログラムといった「マクロレベル」、および教室内・授業といった「ミクロレベル」で、いわゆるテストやルーブリック、卒業論文、GPA などの「直接データ」と、学生実態調査・満足度調査・授業評価等の「間接データ」を用いて学修成果を測定する方法が示された。

同測定方法を用いて、山梨県立大学で測定した「学士力」のモデルを紹介していただき、全学共通科目における下記の「学士基盤力」をもとにしたうえでの「具体的な学修成果」を測るための方法を披露された。

学士基盤力	具体的な学修成果
自然・社会・文化理解	自然・社会・文化を大切にするとともに、専攻する特定の学問分野における基本的な知識を体系的に理解し、その知識体系の意味と自己の存在を自然・社会・文化と関連付けて理解している。
想像力・表現力	豊かな感性や想像力、表現力を身につけている。
実践力・問題解決力	自身の未来を切り拓くために独創的に思考し、問題の発見・探究・解決に向けて行動することができる。
人間関係形成力	発展的な人間関係の形成に向けて、自己省察や他者理解に努めることができる。
自己学修力	自ら学び、成長する意欲や態度を備えている。
地域・国際コミットメント力	地域的・地球的課題に関心を持ち、その解決を志向できる。

本学も含め、どの大学・短期大学も悩んでいる「学修成果の可視化」について、非常に興味深い示唆を与えてくださり、大いに勉強になった。

その後の講師・参加者との意見交換においても、学修成果の可視化の難しさや、FDを含めた大学改革・授業改革を進めていくうえでの問題点や解決方法について積極的な意見交換がなされ、様々な示唆を得ることができた。

2. 研修の成果

2019年度の「能動的学修の教員研修リーダー講座」は、実際にアクティブ・ラーニングを行うことで能動的学修の教育技術を習得していくという実践型の研修であったのに対し、本研修は、本来対面型の研修でデザインされていたものがZOOMによるオンライン型の研修となったこともあって、演習よりも講義が占める割合が高くなってしまった。

しかし、今回は「教学マネジメント」、「内部質保証」、「学修成果の可視化」という、大学が課題として突き付けられている項目でありながら、その実現の仕方に

苦勞している内容について、多くの示唆を得ることができた非常に有益な研修となった。やはり「他を知ることで、己の至らなさを知ることができる」ということに、改めて気づかされる研修となった。

教学マネジメントや内部質保証、学修成果の可視化といった問題は、大学全体に関わることから、私の一存で取り組める事柄ではないが、自分に関わる委員会等で、このような大きな視野を持ったうえで、諸課題に取り組んでいきたいと考えている。

3. 授業への研修成果の反映状況

教学マネジメント・内部質保証・学修成果の可視化という部分については、自身の授業に直接反映させることはできないが、FD 実践発表として私が発表した「2. シラバス作成と授業デザイン」に絡んで得た様々な示唆は、早速自身の授業に活かしていきたいと考えている。

具体的には、「アクティブ・ラーニング」(能動的学修、主体的・対話的で深い学び)の実践に関して、本活動を導入することにより、学ぶ項目の量が減る部分への対処として、事前学習・事後学習を効果的に活用していく視点は、ぜひとも積極的に取り入れていきたいと考えている。

大人数講義の共通教育科目「言語と人間」、国際コミュニケーション学部専門科目「言語学入門」「言語学概論」でアクティブ・ラーニングを取り入れたことは、自身の教育技術の改善につながるとともに、受講生の学びの深さに直結しているという感覚を抱いている。それは、学生からの学修内容に関する質問が増えていること等からも窺える。ぜひ今後とも「アクティブ・ラーニング」を軸に教育技術の改善を図るとともに、それを将来的には教学マネジメント(内部質保証・学修成果の可視化)へとつなげていければと考えている。

学部長	学習・教育支援センター委員長	学習・教育支援センター委員会	名古屋教務課長	係